依つて其の確實性を得たものと信ずるものである。本症は結極 兩親には少なく 兄弟姉妹に出現することが甚だ多いのであるが、然しその同胞出現率は所謂 Mendel の期待値に比すれば遙かに尠ない數値である。但し兩親に於る血族結婚は確かに一般住民より大である故本症の劣性遺傳性なる事は先づ否定出来ない。男女罹患率の差の大なることは本症は男子に於て發病し難い事を示すものであつて、本症は遺傳因子をホモの状態に於て持つて居つても發病しないので、他の好條件が備はる時に於て初めて發病するものと思はれる。即ち女子に罹患率の多いのはその好條件が多く備はつてゐる爲と考へられる。尙 330 家系中本病の有する 5 組の一卵性双生男女兒を發見した。性別は男 1 組に對し女 4 組で、その内 2 組は鏡像的に出現して居り又 2 組は兩側共に脱臼し、他の 1 組は偏側であつた。この症例に依つても本病の遺傳性は相當確實なものと考えられる。

ANAZAWA, J. 1939. On the congenital inheritance of the cleft lip and cleft palate. *Jap. Jour. Genet.* 15: 339-340.

兔脣及び口蓋披裂の遺傳に就て

穴 澤 順 一

慶應大學醫學部豫防醫學教室

兔脣及び口蓋披裂が幾世代に亙つて現はれ、又双胎兒に現はれた事は古來諸學者によつて注目された處である。即ち 1757 年 Jach Trew 以來 James Lucas, Meckel, Anna, Nicati, Steinhouser, Houston, Cannard, Demarquay, Murray, Richet, Passavant, Sproule 等は夫々兔脣及び口蓋披裂の家系圖を報告し、其の家族性出現を認めた。1931 年 Schröder は Münster の外科に於て 180 の手術例中の家族性出現のものより 21 家系を選び、系統的調査をしたが、其の結論としては本症は單一な遺傳型式に因るものでなく、大部分は劣性であるが又不規則優性遺傳を示す事があると言つて居る。双胎兒に發現せる報告としては Birkenfeld, Davis, Wolffson, Dulo-roy, Bramann, Dissmann, Fricius 等の報告がある。本症の遺傳に就ては Haymann, Fritzsche, Schröder は 20%, Stobwasser は 5.7%, Gotthelfs は 7%, Müller は 5-7% の割合に遺傳を認

第 1 表

同胞數	家族數	同胞總數	患者數
0	9	0	0
1	13	13	0
2	15	30	1
3	15	45	0
4	13	52	2
5	5	25	0
6	6	36	2
7	6	42	1
8	3	24	0
	85	267	6

2.25±0.90%

めると言つて居る。翻つて本邦に於ては外山、岩間、林の諸氏は單一ではあるが、其の家系圖を報告し、本症の家族性出現を示唆したに過ぎない。

斯の如く本症の遺傳性なる事は認められてゐるが、本邦に於ては其の系統的研究は淺學にして未だ是を知らない。余は今回學術振興會の一研究として、本症の家系に就き系統的調査を始め、本症の遺傳なるや否やを先づ確かめ、又遺傳とすれば如何なる型式に従ふものなるやを探究せんとし、今日まで集めし 85 家例に就き 同胞、兩親、叔伯父母、祖父母の範圍に亙つて調査した。

其の結果は第 1 表に於て見る如く、同胞に現はれし

率は 26 人中 6 人即ち $2.25 \pm 0.90\%$ で所謂 Mendel の理論値 (26%) に比し甚だしい差がある。故に Mendel の單劣性としては未だ説明困難であるが、一般住民中に於ける本症の存在率 1:1742 (Rischbieth) に比すれば遙かに高率である。即ち遺傳性は確實であると考へられる。以上 85 家系中父に現はれしものなく、母に現はれしは只 1 例である。即ち兩親に出現する率は 170 人中 1 人の割合である。祖父母には現はれて居ない、即ち 340 人中 0 である。又第 2 表の父方叔伯父母 375 人、第 3 表の母方叔伯父母 463 人中各 1 例を見たのみである。

第 2 表

父の同胞數	家 族 數	父の同胞總數	患 者 數
0	2	0	0
1	6	6	0
2	11	22	0
3	13	39	0
4	14	56	1
5	11	55	0
6	17	102	0
7	6	42	0
8	1	8	0
9	1	9	0
10	1	10	0
11	0	0	0
12	1	12	0
13	0	0	0
14	1	14	0
	85	375	1

第 3 表

母の同胞數	家 族 數	母の同胞總數	患 者 數
0	1	0	0
1	1	1	0
2	6	12	0
3	8	24	0
4	16	64	0
5	13	65	0
6	14	84	0
7	10	70	0
8	8	64	0
9	5	45	1
10	2	20	0
11	0	0	0
12	0	0	0
13	0	0	0
14	1	14	0
	85	463	1

兩親の血族結婚は 85 家系中 5 例、即ち 5.88% を示し、父方祖父母の血族結婚は 0、母方祖父母の血族結婚は 2 例、即ち 2.35% である。是を川上理一博士調査の東京市内一般住民の血族結婚率 $4.69 \pm 0.33\%$ に比較して大差がない。

本症の男女罹患比は男 55 人に對し女 44 人である。Fahrenbach によれば男 68% に對し、女 32%、Müller によれば男 63% に對し、女 37% である。

尙本症を有する者で同時に他の畸形を有する者は斜頸及び脊椎灣曲 (原因不詳) 各 1 例であつたが、以上 85 家系調査中本症以外の畸形を有する者が少なからず發見せられた。即ち聾啞 9、ヘルニア 4、斜頸 2、外聽道閉鎖、斜視、先天性股關節脱臼、低能、精神病者各 1 例であつた。是は偶然のものでないといふ印象を與へるが未だ確實な事は言へない。此處では只注意を拂つて置くに止める。

上述の如く本症の遺傳性なる事は確かであるが、其の遺傳型式は複雑にして未だ明らかになつて居ない。今後多數の例を集めて完全なる解決を期して居る次第である。